

經濟論叢

第120卷 第1・2号

-
- 十九世紀後半イギリスにおける労働者状態……菊池光造 1
- 公共投資と社会的割引率……羽鳥茂 33
- 帝国主義確立期日本の対満洲通貨金融政策……松野周治 53
- 国際通貨協定の本質をめぐって……横田綏子 71
- 穀物法廃止後の土地改良……島浩二 98
- 書評
- 安秉珪『朝鮮近代經濟史研究』……中村哲 124
-

昭和52年7・8月

京大經濟學會

記 事

経 済 学 会

ティフ教授講演会について

1977年7月16日に、ポーランドの学者、フェリクス・ティフ教授 Prof. Dr. Feliks Tych が来学され、午後2時より5時まで楽友会館で学会主催の講演・討論会が開催された。通訳は中央大学教授、伊藤成彦氏が担当された。参加者は12名で、ほとんどの参加者が討論に加わり、盛会であった。

ティフ教授は、1929年ワルシャワで生まれ、ワルシャワ大学で19・20世紀のヨーロッパ社会史を研究、1955年モスクワ大学歴史学部で、学位をうけた。1959年、教授資格論文「1914-18年におけるポーランド社会党左派」の研究で、アカデミー歴史研究所から教授資格をえ、労働運動史の季刊学術誌『ス・ボラ・ヴァルキ』復刊に協力し、1971年まで同誌の編集者となる。1973年より『労働運動史文書集』Archiwum ruchu robotniczego を発刊し、その編集者となる。そのかわり、現在、ワルシャワ大学のドクター・セミナリウム「ポーランドおよび国際労働運動史、史料学と歴史」を担当。なお、ローザ・ルクセンブルクの『ヨギヘスへの手紙』3巻、1968-71年を編集した。

報告のテーマは、「ポーランドにおけるローザ・ルクセンブルクの評価をめぐって」であり、その要旨と、それをめぐる討論内容は、ほぼ次のようにまとめられる。

報告の要旨、第二インターの理論家のなかで、カウツキーはたしかにマルクス主義の権威とみなされたが、今日、なお思想的に大きい影響力をもっているのは、ローザ・ルクセンブルクである。彼女の思想の特色は、一つには、労働者階級の究極の目的と日々の実践活動の相互作用を明らかにしたことであり、二つには労働者階級と政治的指導との機能的相互作用を解明したことである。ことに、歴史過程のなかで、社会過程と労働者大衆の役割を弁証法的に発展することを主張し、一方で日和見主義に対して、他方でブランキズムを批判した。また、彼女の社会哲学の特質は、社会主義運動における大衆の自発的活動の意義を主張することであり、それは党指導に操作されるものではなく、闘争の過程で大衆が自ら指導者に成長することが重要である、したがって、自然発生性

と政治的意識性が運動の中で有機的に結合する必要があることを、くりかえし説いた人といえるであろう。

この報告に対し、次の諸点の質問が出された。1、ルクセンブルクが「労働者大衆」の自然発生性に期待をかけたというとき、その大衆の概念はどのような根拠から生まれているか。また、それは現代の大衆概念とどうちがうのか。2、ルクセンブルクの経済理論や帝国主義論が、彼女の思想および現代のポーランドでもつ意味はなにか。3、労働者評議会を、彼女はどのように位置づけているか。1905年にソビエトを知っていたのではないか。

(平井俊彦)